

下蘭壹反二付 壹石代

右者御茶師より致訴訟候二付、願之通元禄十六末年より蘭屋敷高三ツ定免田畑も見取二被仰付候、然ル処寛政六寅年御茶師より致訴訟蘭屋敷高定免三ツ取之所破免、寛政七卯年より見取御年貢取立申候

○古拝借上納金銀訳書

延宝八申年拝借

一金貳千四百五拾五兩

銀四拾五貫五百目

内金五拾兩 上納

残而金貳千四百五兩

銀四拾五貫五百目

金百三拾貳兩

銀貳貫八百八拾目

残而金貳千貳百七拾三兩

銀四拾貳貫六百貳拾目

寛文九酉年拝借

一金五百兩

延宝三卯年拝借

一銀貳拾貫目

内金貳百四十四兩

銀壹卷目

残而金貳百五拾六兩

銀拾九卷目

金五拾壹兩

上林又兵衛

御物御茶師上林味卜

宝曆十三末年より壹ヶ年金壹兩銀三

銀壹貫五百三十目

残而金貳百五兩

銀拾七貫四百七拾目

寛文九酉年拝借

一金貳千百兩

延宝三卯年拝借

一銀百五拾貫目

内金千貳百四兩貳分

銀貳拾五貫三百貳拾目

残而金八百九拾五兩貳分

銀百貳拾四貫六百八拾目

金貳百四兩

銀拾貫貳百目

残而金六百九拾壹兩貳分

銀百拾四貫四百八拾目

寛文九酉年拝借

一金五百兩

内金三百貳拾七兩

銀三匁九分

残而金百七拾貳兩三分

銀拾壹匁壹分

金百五拾三兩

残而金拾九兩三分

銀拾壹匁壹分

寛文九酉年拝借

拾目宛当酉年迄五十一年二上納

御物御茶師八人江

御袋御茶師九人江

宝曆十三子年より壹ヶ年金三兩宛
当酉年迄五十一年二上納

一金千六百兩

御通御茶師三拾三人江

延宝三卯年拜借

一銀百五拾貫目

御通御茶師四拾四人江

内金千四百四十三兩貳分
銀拾匁六分九厘

上納并棄指之分

銀五拾六貫七拾九匁五分貳厘五毛 上納并棄指之分

金四百五拾六兩壹分

銀四匁三分壹厘

銀九拾三貫九百貳拾目四分七厘五毛

金貳百五拾五兩

宝曆十三子年より壹ケ年金五兩銀

銀三拾貫六百目

六百目宛当酉年迄五十一年二上納

残而金貳百壹兩壹分

銀四匁三分壹厘

銀六拾三貫三百貳拾目四分七厘五毛

右之通御座候、以上

酉十一月

上林又兵衛

○起請文前書

一今度御代官役如養父就被仰付、諸事入念重公儀御為第一奉存、聊以御後闇儀仕間鋪事

一御一門方を始諸大名諸傍輩与奉对御為以悪心申掛候族有之候者、早速御勘定奉行中迄可申達候、勿論一味同心仕間鋪候事

一御代官所御仕置之儀、及心之程精を入私欲不仕、万事御為能様可仕候、以来何方二而御代官所被仰付候共同事二相心得可申候、惣而金銀米錢何二而茂納払之儀無油断可成程入念物每無最眞偏頗正路二可

仕候事

付御代官所之内金銀銅鉄鉛山并野山海川御運上場出来候者、同前二相心得可申候事

一御代官所毎年檢見入念御取箇之儀、及心之程遂詮議万事御為能様仕、又百姓茂不困窮様可申付并堤川除御普請其外御作事御賄等御入用之儀二付随分吟味可仕候、御代官所之儀者不申惣而被仰付候御役儀二付、金銀米錢衣類諸道具其外何二而茂一切受用仕間鋪候、勿論手代之儀随分慥成物筋目等遂吟味召抱可申候、尤百姓町人等ヨリ金銀米錢衣類諸道具其外如何様之輕キ品二而茂一切受用借用不仕賄賂等堅諸申間鋪旨誓詞可申付候、并召仕之者二至迄右同断二可申付候事
付上納可仕金銀米錢無油断取立之、少茂無遲滞相納可申候、若御用之儀二付手前二預り置候共取散申間鋪候事

一何方二而茂檢地仕候者御条目之通相守無依怙最眞正路可仕候事

一御用之儀不依何事相談之時存寄之通不殘心底ヲ申出、其上御為能方多分二付可申候事

一跡々被仰出候御条目之儀違背仕間鋪候、御代官所町人百姓江茂無油断可申付候、自今以後被仰出候御条目有之候者同事相守可申候事

付公事訴訟有之時、双方之申分随分入念及心之程致詮議無依怙最眞有体可申付候事

一不限御料私領何方二而茂論所檢使等二被遣候者、依怙最眞不仕明細二見分之上有体二可申上候事

一以御威光私之奢不仕对町人百姓非儀申間鋪候事
付手代并召仕之者共常々相慎私曲不作法不仕候様二堅誓詞申付、若相背候者有之候者急度遂詮議可申付候事

一御茶御用方之儀茂前々之通被仰付候二付、御茶御用之儀及心之候程

入念吟味可仕御後闇儀聊以仕間鋪候事

付以 御威光私之奢仕間鋪事

一万一以悪、心何様之儀相頼候輩有之候共、同意不仕其趣有休早速可申上候事

一御茶之吟味被仰付候御方江無違背受御差凶御茶致吟味差上可申事

付御茶之儀二付家来并下々迄不屈儀於有之者遂詮議可申上事

右之条々雖為一事於違犯者、梵天帝釈四大天王惣日本國中六十余州大小神祇殊伊豆箱根兩所権現三嶋大明神八幡大菩薩天満自在天神部類眷屬神罰冥罰各可罷蒙者也、仍起請如件

天保三壬辰年六月

上林保次郎(花押)

太田備後守殿

松平伊勢守殿

深谷遠江守殿

長田六左衛門殿

遠山半左衛門殿

御物御茶師之分写

起請文前書

一今度初而御召御壺被仰付難有奉存候、御茶之儀心之及候程入念吟味仕差上可申候、御後闇儀聊以仕間鋪事

付以 御威光私之奢仕間鋪事

一万一以悪心何様之儀相頼候輩有之候共、同意不仕其趣有休早速可申上事

一御茶之吟味被仰付候御方江無違背請御差凶御茶致吟味差上可申事

付御茶之儀二付召仕之下々迄不屈儀於有之者遂僉議可申上事

右之条々雖為一事於違犯者、梵天帝釈四大天王惣日本國中六十余州大小神祇殊伊豆箱根兩所権現三嶋大明神八幡大菩薩天満自在天神部類眷屬神罰各可罷蒙者也、仍起請如件

天保三壬辰年五月二十二日

長井貞甫 花押

太田備後守殿

松平伊勢守殿

深谷遠江守殿

長田六左衛門殿

遠山半左衛門殿

高田三郎老

○茶由来

人王百三代後花園院御宇公方義政公東山殿此時代御茶之惣銘無上与書付申候、天正之頃紹陽道陳与申数寄者に御茶之吟味被仰付候、道陳死後紹陽・宗易兩人江被仰付候、此時七種之銘菌与申名を付昔之無上を極上与改申事

森 祝 字文字 川下 奥山 朝日 枇杷

歌に 森祝宇文字川下奥の山朝日につく枇杷とこそ聞

天正年中御茶之料御定、極上壹斤二付代銀六拾目、別儀八代銀四拾目、極揃八代銀式拾目、別儀揃八代銀拾匁、上揃八代銀六匁、是迄御袋茶壹袋二茶目式拾目宛入壹斤を後袋二仕候、此時代ヨリ壹袋に拾匁宛入壹斤を式拾袋二仕候、此時代入日記に半の字を書申事也

一宗易死後古田織部御茶吟味被仰付候、此仁色青き茶を専ら好被申候、

色青きを上也と被申候故、昔風の色白きハ詰茶杯二仕、本葉の青きを専極上に仕立申候事

一家康公始終昔風の御茶を御好被遊候御事

初昔 三月色青キ 依上意

後昔 三月色白キ

一秀忠公御時代元和元年織部死去後に小堀遠江守に御茶吟味被仰付候、此仁専色白キ御茶を極上袋入二仕立、於に今上林家好白与申は此故也、色青きを詰茶に用候御茶銘の事、むかし色白きを専とし中頃は色青きを専とし其後又色白きを専と仕候故、最初の昔と申心を以初昔と付、初昔に少し風儀替りたるを後昔と付候事、初昔・後むかしは公方家御好之風儀御茶極上の惣銘、茶師何れの家二而茂頭立て申候故、三番目ヨリは其家の茶として面々存寄の銘を付申候事なり昔は茶をたつるに、濃を好みて茶碗に粘る程に調けるを遠州公より始て薄く調られし、近代牧野佐渡守親成公所司代職の時、御茶吟味のため宇治へ毎度御越ありしに、名譽の御茶□にて合□を定られ、挽茶壺匁に水式拾匁と極給ひて猶々薄くなれり、是を当世服と云、古へに替り今ハ極上別儀其外の品々も園所定りて茶の仕立も名別也、古來製茶式百目を一斤と定め、夫を十に分て式拾目を壺袋として壺に詰送るよし、中頃ヨリ又式拾匁を分て拾匁を半一袋と名付る、是次第に茶の薄くなれる依て也、初昔・後昔と名付るハ白茶に成て一の白二の白と云しを、茶に惣名昔といへる故初昔・後昔と称し侍る也、其外ハ茶蘭の文字を袋の銘に用る事色々也、古ハ宇治茶蘭大名面々持分の茶師に預置て売買の沙汰ハなかりしを、信長公宗易を召出されし以後売買に被仰付可然由申上、則宗易宇治へ来て価を極て惣茶師に連判させて、極上壺斤永樂三貫文別儀式貫文極揃壺貫文別儀揃五百文と定し也、此外の上揃といふ下品あり、宝永年中に茶料三割増云、今ハ値段二成、茶の製昔とハ格別也

二六四 宇治里袋

宇治
里袋

一宇治旧記里袋は宇治郷中の集書也、就中上林家由緒初同家万事の書也、仍而入用の廉斗を拔出し置

一両上林定式献上

年頭 柄杓五本 歳暮 茶釜 拾本ツ、

御物御壺詰上候節御試之御茶一壺ツ、

一献上 夏切 壺壺宛 御物御茶師

一年頭 御茶釜 拾本 上林味卜

一同 同 五本ツ、御物御茶師

一御代替御礼、御物御茶師銘々罷下献上御柄杓御目見被仰付、御暇之節黄金壺枚ツ、拝領

一御袋御通共惣代吉人献上扇子式拾本、御目見被仰付御暇之節時服拝領仕候事

一御物御蔵并御番所、寛永十四年三月加藤肥後守伏見屋敷蔵并座敷伏見より宇治江引立候、御奉行小堀遠江守同権左衛門被參、御用銀壹貫六百九拾壺匁八分

右御蔵座敷等門太郎改易二付御払

右御蔵座敷等門太郎改易二付御払

茶由来并御茶料之事

人王百三代後花園院御宇公方義政公此時代御茶物銘無上下書付申候、
天正之頃紹鴎道陳ト申数寄者ニ御茶の吟味被仰付候、道陳死去の後紹
鴎・宗易兩人へ被仰付候、此時七種の銘圖と申名を付昔の無上を極上
と改申事

森 祝 宇文字 川下 奥山 朝日 枇杷

歌に 森祝宇文字川下奥の山 朝日につゝくひわとこそ聞

天正年中御茶之料御定

極上 壹斤二付 代銀六拾目

別儀 壹斤二付 代銀四拾目

極揃 壹斤二付 代銀貳拾目

別儀揃 壹斤二付 代銀拾目

上揃 壹斤二付 代銀六匁

是迄者御袋茶壹袋ニ茶目貳拾目宛入壹斤を十袋ニ仕候、此時代より

一袋ニ拾匁目宛入壹斤を貳拾袋ニ仕候、此時代入日記ニ半の字を書
候

一宗易死後古田織部御茶吟味被仰付候、古田者色青きを専好ミ被申候、
色青きを上々与被申候故、昔風の色白きを詰茶杯に仕、本葉の青き
を専極上に仕立申候事

一家康公始終昔風の御茶を御好ミ被遊候事

初昔 三月色青き 依上意

後昔 三月色白き

一慶長九年秀忠公御時代元和元織部死後小堀遠江守ニ御茶吟味被仰付
候、此仁専ら色白き御茶を被好、依之昔風の色白き御茶を極上袋入
ニ仕立、於に今上林家好白ト申ハ此故也、色青きを詰茶に用らる

御茶名之事

むかし色白きを専らとし、中頃は色青きを専らとし、其後又色白きを
専ら仕候、夫故最初の昔と申心を以初昔と付、初昔に少風儀替りたる
を後昔と付候事

初昔・後昔者 公方家御好の風儀御茶極上の惣名故、茶師何れ之家ニ
而茂頭ニ立申候故、三番目ヨリハ其家の茶として面々存寄の銘を付候
事

極上

別儀 極上之仕立と別成儀ニ以付候

極揃 極上之撰出しとの道理也

別儀揃 別儀の撰出しとの道理也

上揃 極揃の撰出しとの道理也

極上の撰出しを極揃と名付、其下の字を取て上揃と付候

一大猷院様御代寛永十九年午とし、宇治御茶師因窮ニ付小堀遠江守殿
を以奉願、料物三割増に被仰付候

一御茶摘初之儀、立春より八十日目、尤其年々旬相考摘初申候

通円

一古来三ノ間ニ而汲候釣瓶有之、只今ニ至り御願見御目付衆御一覽、
尤秀吉公之御時代御茶の水汲候様ニ申伝候

一通円儀御尋被遊候、治承四年より此節迄之通円七兵衛年々血脈相続
仕候処、凡五百七拾年当年迄ニ罷成候

一宝曆六年九月十七日辰刻、塔のしま宝塔崩倒る、其節塔の内より
箱流出入、宝具種々有之、略ス、槇島村へ上り宇治へ名主持參、惠

心院へ預置、断二付橋寺へ預置候事

一河村瑞見宇治川さらへ元禄十一寅年

堤

一文禄三年大掠より伏見迄新堤被為築候、御奉行岐阜中納言殿、其節宇治はしを伏見へ御引取被成候事

一慶長四亥年 神君様依仰山口玄蕃頭殿同名右京之進殿父子二而新二橋を被掛候事

一榎島与宇治之間大川船渡之処、慶長十七子年堤出来平地二成

一初むかし

一別儀御茶 壹斤 五拾貳匁

一後むかし

一上間詰 同 三拾匁

一極昔

三拾代と云

×三種かけ目拾匁二付
銀三匁九分
上五匁七厘

一極揃 壹斤二付 貳拾六匁

一別儀揃 壹斤 代拾六匁

一字治茶 壹斤 代貳拾匁より
十五匁迄

一白折 同 代壹両より
三拾五匁迄

一折鷹 同 代貳百足

一下折鷹 同 拾八匁

一喜撰 同 代拾五匁

一花橘 同 代百足拾匁迄

一山吹 同 代九匁五分

一朝日 同 代八匁

一山影 同 代七匁

一一 森 壹斤代六匁

一えり葉 壹斤 代五匁

一上敷出し 同 代三匁五分

×

葉の銘に喜撰・山吹・朝日など名付侍るは、菟道に名たゝる名所をおふせたるにて、茶園仕る所にあるにはあらず、さるをかの法師の住ける山を今に喜撰か嶽と名に呼び伝りて、里よりハ式里余り東にあたりぬ、この山に自然生の茶の木ありて、この木の間かしこの岩間に一本ふた木はらはらと生たちぬ、是を摘て此茶を製す、この喜撰といはむものは是なるへし、はしめにいへる朝日・山吹のたくひにはあらさるとそ

(朱筆)

「此書類ハ本家上林久道方ニ有之

明治十九年三月、製茶取締所江此度京都府知事北垣国道殿より内意二而、旧茶師之履歴書并旧来之御茶壺取扱之廉々相認差出候様、頭取伊藤熊夫殿当地へ入来二付、則本家へ参り此書面借り写取差出ス此外ニ銘々之業務沿革履歴書并古書ハ当方所持之豊公之御書写尾崎坊所持之 家康公御書之写長井藤吾所持之 家康・秀忠公御書之写等夫々差出ス、則幹事菱木時之助より四月十二日伏見へ持参之事」

明治十九年四月認之写ス

十二世 春松 秀実代

隠居松好写之ス

三四二 茶ノ沿革

茶ノ沿革

夫レ茶ハ天地開闢ヨリ造化ノ賜ニシテ、上古ヨリ本朝ニ有ル事明ナリ、宇治ノ山深ク疊リ谷幽カナル奥マテモ茶ノ樹ノアラサル処ナシ、是人カノ及フヘキ事ニアラサルヘシ、継体天皇・安閑天皇ノ御宇玉碗アリテ其以前ヨリモ有為トナリ、又崇峻天皇ノ御宇ニ茶ノ事アリ、天智天皇ノ御宇志賀ノ都ニシテ始メテ内裏ノ御園ニ移シ植シメ給フ事明ラカナリト茶旨略ニ記セリ、国史実記ニハ平城ノ都天平中ニアリ、要原引字大全ニハ桓武帝延曆中大内裏御造營ノ時、茶園ヲ良ノ地ニ開キ玉フ事出タリ、伝教大師延曆十九年高雄寺ニテ南都六宗ト対論ノ時、茶ヲモテ勅使ヲ饗サレシ事、入唐前ニシテ本朝ニ産スル所ノ茶ナリ、大師ノ入唐帰朝ノ時茶種ヲ持歸リ阪本ニ植玉フハ延曆二十四年ナリハ滋賀郡阪本官幣大社日吉神社御茶園ト標札有リ今尚存セリ

又類聚国史曰、嵯峨天皇弘仁六年六月畿内并近江・丹波・播磨等ニ殖茶云々ト、然レトモ茲ニ延曆元年ヨリ弘仁六年ニ終ルハ作者廿三人諸總数十九首合為一卷、凌雲集中ニ秋日皇太弟池亭ノ御製ニ肅然幽興処院裏滿茶煙云々、亦同年夏日左大将軍藤原冬嗣閑居院ニ於テ御製ノ詩ニ、吟詩不厭搗香茗乘輿偏官聽雅彈トアルヲ是ニ由テ此ヲ觀レハ、弘仁以前ヨリモ我国ニ天然ノ茶アル事昭々タリ、又文花秀麗上卷中ニ夏日左大将軍藤原朝臣閑院納涼心製令製ハ淳和天皇、提琴檮茶老梧間トアリ、延喜二年醍醐天皇仁和寺へ御幸ノ御時、法皇御対面ノ後御茶ニ蓋ヲ召サレタリ、同年間ニ菅原大政大臣ノ詩ニ東方明未睡悶飲一杯茶トアリ、同年間ニ尾張・長門兩國ヨリ茶碗ヲ奉ル事アリ、又村上天皇一時御腦アリ、医薬効ナシ、此時ニ当リ空也上人茶ヲ点シテ天皇ニ奉ル、乃チ服御アリテ後御腦平癒シ玉フハ毎歳年ノ始メ日本国中例ト

ナリ、喫スルトコロノ茶ヲ王服茶ト称スルハ此ニ始マルト云、即チ王服ハ大福ト通ス、而シテ又天曆五年疫病癘流行ノ時、空也上人京都六波羅蜜寺ノ觀世音ノ像ヲ車ニ載セテ洛中ヲ輓キ廻リ、薄茶ヲ点シテ諸人ニ服サシム、因テ患者平癒スト、其茶タルヤ宇治ニ産スル所ノモノナリトハ口碑ニ伝レリ、今ニ於テ空也堂ニ茶釜壳アルハ是ナリ、然ラハ建久ノ時代明惠上人分裁ノ為ヲ以テ起原ト云フ可カラス近衛天皇御時久安・仁平年間ニ宇治橋辺ニ住ス大敬庵通円ナル者源頼政公ニ茶ヲ進ムル事アリ

後白河法皇ノ御年五十ノ御賀ヲ内裏ヨリ奉ラセ玉フ時、康和ノ御賀ノ例ニヨリ御茶參ラセ玉ヘリシ事、其時右大臣月輪殿兼定公ノ御日記ニミヘタリ、然レトモ唯高貴方ノ召レシノミニ止リテ、未タ世ノ人茶味ヲ愛スル者稀ナルニヨリ、茶樹漸次衰頽ニ至ルモ、建久年間建仁寺僧榮西禪師帰朝ノ後、梅尾ノ僧明惠上人ト共ニ茶樹ヲ移植スハ榮西禪師ハ初メ筑前国背振山ニ殖、是ヲ岩上ノ茶ト名、梅尾明惠上人ハ自寺ノ辺ニ殖ユ、此時ニ至リ曩ニ弘仁年間畿内并近江・丹波・播磨等ノ殖茶モ年移リ多クハ枯衰セルヲ、明惠上人自ラ宇治ニ到リ此地茶質ニ適スルヲ以テ尚移植シタリキハ明惠上人ノ好ミノ釜ニ自筆ヲシテ茶ノ十徳ヲ鑄付タルニ、一〇諸仏加護 二〇五臟調和 三〇孝養父母 四〇煩惱消除 五〇壽命長延 六〇睡眠自除 七〇息災延命 八〇天神隨心 九〇諸天加護 十〇臨終不乱

又東鑑卷廿二云、健保二年二月廿四日將軍家聊御病腦諸人奔走但無殊御事、是若去夜御淵醉餘氣歟、爰ニ葉上僧正侯御加持之処聞此事、称良藥自本寺召進茶一盞而相副一卷書令献之所譽茶徳之書也、將軍家及御感悅ノ云々ハ此送書ハ榮西禪師喫茶養生記ナランカ、茲ニ於テ世人茶ノ有徳ヲ知ラシムルニ因テ茶樹ノ栽培ニ力ヲ尽スニ至ル、此時

我朝ノ茶ノ名山ハ梅尾ヲ以テ第一トシ、宇治之二次、其外仁和寺・醍醐・葉室・般若寺・神尾寺等トス、続テ后ニ好茶ハ宇治ヲ以テ第一トシ、梅尾之二次トナリタリキ、後醍醐天皇ノ御時帝尤モ茶ヲ愛セラレ、殊ニ茶ノ会ト云事世ニ拡張シテ四種十服ノ茶ノ品ヲ定メ、而シテ七十服茶百服茶ナト云事聞ヘタリ、是ハ十服茶ノ式ニ因テ数多ノ物ヲ用ユナリ、其十服ノ式ト云ハ茶三種ヲ各四服ニ包ミ一服宛ヲ取テ試ム、残ル九服ニ更ニ茶一種ヲ加ヘ是ヲ試ミヌモノナレハ客ト名合シテ四種十服トシ建ルナリ、是ヲ三種試ノ茶トモ又貢茶トモイヘリ、足利義満公茶ヲ愛賞シテ宇治ノ園ノ中將軍自ラノ郷園ハ森ノ園・川下ノ園、武衛ノ園ハ朝日ノ園、京極ノ園ハ祝ノ園・奥ノ山園、山名ノ園ハ宇文字ノ園・琵琶ノ園、是ヲ宇治七種ノ名園ト号セラレ、此時公茶味ヲ感シテ無上ト名ツケラレタリ、此園ノ歌ニ

森祝宇文字川下奥の山

あさひにつゝく琵琶とこそ聞

続テ將軍義教公モ茶ヲ好ミ能阿弥ニ命シテ茶杓作ラシム、是ヲ茶人自ラ茶杓ヲ削初メナリ

続テ將軍義政公專ラ茶ヲ愛セラレ芸阿弥・相阿弥等ヲ信從セシメ嘗テ珠光ヲ召シテ茶礼ヲ問フ、茶道ノ宗匠ト称セラル、我朝ニ於テ茶道ノ宗匠此ニ始ル、此頃東山ニ銀閣寺ヲ建テ東求堂ノ内ニ珠光ニ命シテ四筵半ノ茶亭ヲ作ラシム、蓋シ吾國茶礼ノ専ラ世ニ盛ンニナルハ公ヨリ始マル、文明年間茶畑初テ霜覆ヲ設ク、宇治茶師ノ祖先等ノ發明ナリ、煎茶ノ宇治製ハ従是前ニ起レリ、又同時珠光ハ松花ノ青香壺ニ茶ヲ詰宇治ヘ一倍ニテ無上ヲ誂シム、是ヨリ茶銘ニ別儀ト云事初レリ

続テ將軍義昭公モ尤茶事ヲ愛セラレ世上益マス盛ルニヨリ近村近郡ノ輩宇治ノ名声タルヲ濫用シテ茶ヲ諸國ニ販売スルニ至レリ、此ニ於テ

カ左ノ禁制ヲ達セラレタリ

近里輩以在々所々茶号宇治茶於諸國恣令売買事言語道断次第也、所詮至加之類者堅致停止屹、又寄事於左右○○非分之儀止商売続在之者相共可致加御成敗之由被仰出也、仍執達如件

永祿十三年

晴長 書判

三月廿八日

昭連 書判

宇治惣中

尚亦諸侯ニ於テモ盛ンニ行レタル事左ノ文章ニ依テ明ナリ

為嘉例初葉茶一袋到来悦入候、尚善三郎可申候、謹言

三月廿七日

晴元 花押

金持弥左衛門とのへ

為嘉例別儀新茶二袋到来喜入候、猶与十郎可申候、恐々謹言

氏綱 花押

橋本弥左衛門尉殿

織田信長公モ甚々茶礼ヲ好ミ、紹鷗及利休ヲ召シ茶礼ヲ学ハレタリ、此頃ニ至リテハ宇治及近村近郡ニ於テモ専ラ製茶業盛ニ及ヒタリ、然ト雖モ名茶ハ宇治ニアリテ、七種ノ名園ノ茶銘無上ノ名ヲ紹鷗及利休ヲシテ極上ニ改メシメラレ、公ハ宇治ノ茶師森彦左衛門ニ茶ノ調進ヲ命セラレタリ、知行三百石、宇治名園七種ノ内森ノ園ハ往昔森彦左衛門ノ姓ヲ以テ名ケタルモノナリ、今尚存ス、森家ハ家康公ノ時代御茶

二齟齬有之為二知行被召上、是ヨリ上林掃部之丞託セラル

豊太閤ノ大ニ茶礼ヲ好レシ事ハ世人ノ克ク知ルトコロニシテ、曾テ千利休ヲ召シ命シテ茶道ノ礼式ヲ定ラル、茶ハ尤モ宇治ノ各茶師ニ調進ヲ命セラル、此時宇治御茶ノ料御定ノ極上一斤ニ付代銀六拾目、別儀ハ代銀四拾目、極揃ハ代銀二拾目、別儀揃ハ代銀拾目、極上ハ代銀六匁、是迄ハ御袋茶壹袋ニ茶式拾目宛入一斤ハ拾袋ナリシヲ、此時代ヨリ一袋ヲ拾匁宛入一斤ヲ二十袋ニ改メラル、故ニ此時ヨリ茶ノ入日記ニ半ノ字ヲ記スルヲ例トセリ、秀吉公・家康公ト御和睦アツテ御上洛ノ砌、公宇治へ御成、上林掃部之丞方へ可被為入旨被仰出、利休ニ命シテ掃部之丞構内へ御殿ヲ建ラレ則被入、此時掃部之丞ヲ御前工被為召、三州越ノ時途中迄御迎ニ被越御案内仕、其上石山鹿飛ノ働神妙ニ被思召候為褒美、御知行ノ外江州蒲生郡糠塚村高百石知行御加増拜領仕候事

又豊公古器ヲ集メ北野七本松ニ於テ大茶ノ湯ヲ催セラレ、是ヨリ諸国専ラ茶道流行ス、因テ宇治近郡村々ニ至テモ製茶ヲ以テ業トナス者盛ンナリシヨリ、機ニ乘シ諭安ノ徒己ノ努力ト精勤トヲ用ヒスシテ、唯宇治ノ二字ヲ用ヒテ諸国ノ者ヲ籠絡スルニ至レリ、因テ此時豊公ノ禁制書類今尚宇治ニ存ス

城州久世郡宇治郷

一 他郷之者号宇治茶似銘袋至諸国例商売事

一 国質所質付押売買事

一 理不尽之催促并諸取沙汰事

一 陣取寄宿之事

一 喧嘩口論諸事非分族申懸事

右条々堅令停止、屹度於違犯輩者速可処嚴科者也、仍如件

天正十二年正月日 (朱) 豊太閤

当年茶詰事、從來朔日何モ可相詰、其以前二壺在所ヲ出事停止候也

三月廿三日 (朱) 豊太閤

上林掃部之丞とのへ
上林彦右衛門とのへ

抹茶并帷一到来之悦被思召候、猶豊田龍介可申之由ニ候也

宇治 (朱) 豊公

向坊

加藤清正公ノ書ニ

我家中之茶其許任望堅一國可為相詰候、如件

卯月日 清正花押

長者彦助殿

後陽成天皇ノ御宇、御物御茶壺進獻ノ事始マリ、毎年宇治旧茶師ノ恒例トナル、徳川將軍家康公尤モ茶ヲ好マレタリ、乃御物・御袋・御通ノ三茶師ヲ置タル、其由来左ニ

慶長八年四月四日家康公御書

聞茶早々到来祝着候、一段能覚候、猶紹高ハ紹高ハ此時官吏伊藤

紹高ナリ可申候、謹言

卯月四日

長井貞信

家康 花押

上林掃部ノ丞母御茶仕立候事名人ノ由、上意ニテ若森ノ園畑祖母江拜領被仰付、夫ヨリ祖母昔ト申候事、又堺ヨリ家康公三州へ御通被成候節、本多佐渡守指図ヲ以テ木津川堤藪村迄人数召連御迎被出、其時事ニ被出候ニ付赤布引裂面々袖印ニ仕申候、依之上林ノ赤手拭ト申事家康公ノ御上意被為遊候

万里小路入道文

禁中女院御所様御壺式下シ申候、慥ニ可為受取候

一 おも壺極十 別儀詰メ

一 西香ニハ極ソ、リ詰ふくろなしに

一 壺斤入ニハ一服入三ツ詰ハ極ソ、リニ而頼入候

おも壺ニ袋茶十一詰六ツツ、ミニテよろし茶是をくわひん壺へ

新茶ニテ御詰ニテ可給候、頼候〇〇段明日深斎へ申候あと罷下

候て可申候、猶兵部ニ申渡候、恐々謹言

卯月廿日

万人 花押

尾崎坊

慶長八年五月十六日徳川家康公ノ時、大老職土井大炊頭利勝書

御状殊夏切之壺上下之家并袋等迄被人御念贈賜候茶勝申、別而忝

存、然者將軍様より当年之御茶被仰付候儀忝々旨得御意尤存候、

於我等モ満足申候、猶期後音候、恐々謹言

五月十六日

長井新兵衛殿

土井大炊頭利勝花押

猶以今年モ壺進候処乍例被人御念之由笑雲ハ笑雲ハ茶道役也、申聞喜悅之至候、以上

秀忠公時代元和元年古田織部死去後小堀遠江守へ御茶吟味被仰付、此仁専ラ色白キ御茶ヲ極上袋入ニ仕立、に今上林好白ト申ハ此故ナリ、色青キヲ詰茶ニ用候、御茶銘ノ事むかし色白キヲ専ラトシテ中頃ハ色青キヲ専ラトス、其後色白キヲ専ラト仕候故ニ、最初ノ昔ト云心ヲ以テ初昔トス、少シ風味替リタルヲ後昔ト付候事、初昔・後むかし公方家御好ノ風儀御茶極上ノ惣銘、茶師何レノ家ニテモ頭立テ申候、三番目ヨリ其家ノ茶トシテ好寄ノ銘ヲ付申候事ナリ

古田織部御茶吟味被仰付、此時色ノ青キヲ好マレ、依テ色ノ青キヲ極上トセラレ、故ニ昔風ノ色ノ白ヲ詰茶トシタリ

家康公始終昔風ノ御茶ヲ好ミ被遊候事

初昔 三月 色青キ

後昔 三月 色白キ

依上意

慶長十年六月廿三日秀忠、公信書

夏茶詰壺到来、遠路一入祝着候、猶大久保相模守可申候也

六月廿三日

秀忠 花押

長井入道とのへ